

# CalArts のプログラムレビューに関する考察 —わが国コンテンツ教育分野の質保証・向上への示唆—

山口 豪

デジタルハリウッド大学

## 【目次】

- I. 問題提起と本稿の目的
- II. 先行事例研究のレビュー
- III. CalArts のプログラムレビュー
- IV. わが国の高等教育機関への示唆
- V. CT 分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割
- VI. 残された課題

## [キーワード]

学習成果、プログラムレビュー、カリキュラムマップ、ルーブリック、実験的アニメーション

## I. 問題提起と本稿の目的

近年、わが国の高等教育の質保証・向上に関して、①学習成果の設定・評価や②プログラムレビューの重要性が着目され、中央教育審議会大学分科会将来構想部会（2017）では、これらの点が重要な課題や論点と検討の方向性として示されている。そうした中で、わが国では、医・歯・薬・工学、看護学、獣医学等の専門分野別評価において、上記①②に関する取組が進み、日本学会会議では、多くの学問分野で大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準が策定されている。

上記の動きの中で、コンテンツ分野<sup>1</sup>（以下「CT 分野」）に焦点を当てた上記①②に関する議論は、未だ多くなされておらず、CT 分野の高等教育の質保証・向上に関する取組は、他の分野と比較して出遅れ

ている。このような状況に鑑み、今後わが国で、そうした取組を推進し、その中で特に鍵となる上記①②を実施することが重要であると考え。それでは、わが国の CT 分野の学部・研究科等を擁する高等教育機関（以下「CT 系大学」）で、上記①②をどう実施すればよいのか。

その手掛かりとして、本稿では、米国の芸術系大学の California Institute of the Arts（以下「CalArts」）で実施されている上記①②の先進事例を考察し、その考察から、以下 2 点を導出することを目的とする。

第 1 は CalArts の上記事例の特徴を考察し、CT 系大学の参考に供することである。第 2 は上記の考察結果から CT 分野の質保証システムの将来像を示すことと、筆者が所属するコンテンツ教育学会の役割の提言（私案）を示すことである。

## II. 先行事例研究のレビュー

本稿に関する CT 分野の先行事例研究について、以下 3 点からレビューを行う。

第 1 に学習成果の設定・評価については、英国 QAA（The Quality Assurance Agency for Higher Education）による *Subject Benchmark Statement, Art and Design*（分野別参照基準 アート&デザイン）がある。また、それを活用しているロンドン芸術大学の事例概要が日本高等教育評価機構（2007）で示されている。なお、この基準は山口（2018）で翻訳を行った。

第 2 にプログラムレビューについては、全米のアート&デザイン分野の専門分野別ア krediteーション

団体である National Association of Schools of Art and Design (NASAD) を受審したカルフォルニア州立大学ノースリッジ校の同レビューの一部を紹介した未来工学研究所 (2009) がある。そこでは、同校の5年サイクルのプログラムレビューのプロセスや手続きの概略が示されている。

第3に質保証システムについては、日本高等教育評価機構 (2007) で、NASAD のアクレディテーションシステムの概略と米国、英国、オランダに所在する6つのCT系大学の質保証の仕組みの概略が解説されている。

以上から、上記3点について、その概略やその一部を考察したものはあるが、CT系大学の参考に供すべく各内容の詳細を考察したものは、管見の限り存在しない。また、CalArts の取組をわが国に紹介した文献も見当たらない。更にCT分野に焦点を当て、その質保証システム全体の在り方について提言を行ったものも見受けられない。従って、本稿の内容は、一定の新規性・独自性があり、今後CT分野での新たな研究の推進や展開に資することができると思われる。

### Ⅲ. CalArts のプログラムレビュー

#### 1. CALARTS の概要

CalArts は、米国カリフォルニア州ロサンゼルス郡サンタクラリタ市、パレンシアに本部を置く1961年設立の私立大学である。そのミッションは、「世界における知識と経験の形を広げ、受け入れられているアイデアに疑問を投げかけ、創造的な可能性に到達するための技術と個人的な意欲を養成するよう、アーティストに教授すること。また、そのアーティストが、現在及び将来の文化の形態において、世界的に重要な作品を創造するよう挑戦せしむること (CalArts, 2016, 3頁)」である。

CalArts には、2016年で、951人の学部生と496人の大学院生が在籍している。CalArts は、学位取得のための基幹教育プログラムとして、①アート、②ダンス、③映画／映像、④音楽、⑤演劇、⑥クリティカル・スタディーズを提供し、上記①～⑥の6学部・6研究科を擁している。2016年の学生全体の男女比は、42%

対58%であり、人種、民族的には白人51%、ヒスパニック系又はラテン系15%、アジア系12%、アフリカ系・アメリカ人7%、その他15%と多様である。同年の教員数は、常勤が158人、非常勤が208人であり、学部生対教員の比率は6.6%である<sup>2</sup>。

#### 2. 実験的アニメーション専攻のアウトカム・アセスメント

本稿では、CalArts の映画／映像学部・研究科の実験的アニメーション (Experimental Animation) 専攻のアウトカム・アセスメントを取り上げる。その理由は以下2点にある。

第1に映画／映像学部・研究科の学生数割合は2016年で全体の約27%と他のそれと比較して一番多く重要な学部・研究科であり、その内の同専攻は、アニメーション作家が「個人」で自分独自の制作方法を案出することで作品をつくりあげる教育を行うという先進的な取組を実践していることから、CT系大学にとって重要な示唆が得られると考えられる点である。

第2に米国のアニメーション教育の最高峰に位置付けられる重要な専攻であり<sup>3</sup>、この専攻では学士・修士課程の明確なアウトカム・アセスメントの仕組みを持ち、両課程を擁するCT系大学にとって参考になると考えられる点である。

##### (1) 学習成果の設定・評価

CalArts では、全学部・研究科の全専攻で学習成果が設定されている。その内、実験的アニメーション専攻の学士・修士課程における学習成果は、表1の通りであり、①創造的発達、②個人の表現、③文脈的知識、④デジタルスキル、⑤コミュニケーションと批判的スキル、⑥プロフェッショナリズムの観点から設定されている。

##### (2) カリキュラムマップ

CalArts では、各専攻の学習成果の達成にどの授業科目が寄与するかを示したカリキュラムマップを全学部・研究科の全専攻で定めている。その内、実験的アニメーション専攻のそれは表2である。表2縦列の授

表1 実験的アニメーション専攻の学習成果

	学士課程の学習成果	修士課程の学習成果
1. 創造的 発達	学生は、絵画、アニメーション、映画製作の十分に開発されたスキルを備えた創造的なプロセスを考案し、独自性のある表現の開発を考案する。	創造的な作品のすべての側面において、学生は高度な能力を持つ。学生は熟達したアニメーションや映画制作スキルを開発する。学生の論文のプロジェクトは非常に独自性のある意見を示し、その芸術的な作品は完全に専門的なレベルである。
2. 個人の 表現	学生のスタイルは分かり易く魅力的である。学生の作品は、実質的な創造性と独立したアイデアの深い発展を示す。	学生の論文は、情報に通じ、革新的で影響力のあるものである。独創的なアイデアと技術の両者を、独創性の高い作品を制作する際に使用されている。
3. 文脈的 知識	学生は、タイムベスト・アートにおける現在の発展を認識し、批評的に論じることができる。また、アニメーションや映画製作の過去の動向を認識することができる。プレゼンテーション、ディスカッション、ライティングにおいて説得力のある形で彼/彼女の作品の歴史的/文化的/社会的文脈に関する彼/彼女の高度な理解を明示することができる。	学生は知覚面での重要なスキルを持ち、芸術界、アニメーション界、そして特にタイムベスト・アートの世界における自分自身の作品の歴史的、社会的、文化的側面を認識し、批評的に論じることができる。
4. デジ タル スキル	学生は技術を適切かつ自信を持って適用し、有意義な方法で様々な技術を組み合わせて、望ましい成果を達成する。学生はそのプロセスを説明することができ、また、他の人が問題を解決するのを助けることができる。	主要な技術機器、ソフトウェア、及びデジタルプロセスを使用する学生の能力は、彼または彼女が他者に教えるように求められる範囲のほとんどを超えたものであること。学生の論文プロジェクトでは高度な理解とイノベーションが明白であること。
5. コミュ ニケー ション と批判 的 スキル	学生は、他の人の意見に反するアイデアについて説得力を持って主張することができる。学生は聞いたことに耳を傾けて答えることができる。彼/彼女は自分自身の議論において知識を効果的に使用し、他の人の意見を真剣に受け止めることができる。彼/彼女はプロジェクトで他の人たちと一緒に首尾よく協働することができる。	学生は協力者やアドバイザーとして他の人たちと一緒に十分に協働することができ、また、効果的なディレクターであること。
6. プ ロ フェ ッ シ ョ ナ リ ズ ム	学生の個人的な作品が期待を上回る。学生はプロフェッショナルなプレゼンテーションを行うことができ、また、プロフェッショナルな作法を理解することができる。学生の作品は目標指向型で体系化されており、学生はプレッシャーのもとでも十分に取り組むことができる。学生は教員と良好な関係を持ち、価値のある情報または助言を同僚に対して頻繁に提供することができる。	プロフェッショナリズムと専門的知識の高さに基づき、学生は他の人たちによって追求される存在であること。また、学生は、幅広いコンタクトを持ち、より大きな芸術界への統合に取り掛かる存在であること。彼または彼女のプレゼンテーションは刺激的であること。彼/彼女は優れたプロフェッショナルな作法を理解し実践することができる。学生は、個人的かつ芸術的な目標を達成することができ、また、能率的であり、さらに、プレッシャーのもとでも十分に取り組むことができる。学生は、価値のある情報または助言を同僚に対して頻繁に提供することができ、また、教員との良好な関係を持つことができる。

出所) CalArts (2014) の1～3ページより筆者作成

業科目が、表2横列の1～6（表1の学習成果の1～6を指す）のどの学習成果の達成を意図しているかを明確に示している。また、このマップは、各授業科目でどの程度学習成果を達成することができたかをアセスメントする上で非常に重要であると共に、CalArtsのプログラムレビューの重要な要素の1つになっている。

### 3. ルーブリック

CalArtsでは、学習成果をアセスメントするツールの1つとしてルーブリックを採用している。本稿では、そのツールの代表的事例として、ホリスティック（全体的）ルーブリックとアナリティック（分析的）ルーブリックを考察する。

#### (1) 全体的ルーブリック

全体的ルーブリックの一例として、表3のライティ

表2 実験的アニメーション専攻のカリキュラムマップ

美術学士 カリキュラムマップ	1	2	3	4	5	6	美術学修士 カリキュラムマップ	1	2	3	4	5	6
アニメーション基礎	×	×		×	×	×	サウンド・アキュイジション	×	×		×		
ハイブリットイメージング	×	×			×	×	実験的アニメーターのための描画テクニック	×	×			×	×
インターメディアイトアフターエフェクツ	×	×			×	×	ハイブリットイメージング	×	×		×	×	
アニメーション美術学士の歴史	×		×		×		アニメーションのためのデジタルパス	×	×		×		
サウンド・アキュイジション	×	×			×		初年度の短編映像	×	×			×	×
デジタルパスとショートプロジェクト	×	×		×	×	×	実験的アニメーターのためのポストプロダクションサウンド	×	×		×		
実験的アニメーターのためのポストプロダクションサウンド	×	×			×		アニメーションの歴史に関するセミナー	×		×			×
構造化戦略	×		×			×	構造化戦略	×		×			×
映画史 (2)	×		×				実験アニメーション論文に関するコンセプトセミナー	×	×	×		×	×
実験アニメーション：直接的テクニック	×	×		×		×	実験アニメーション論文作成のためのセミナー	×	×	×		×	×
実験アニメーション：学部における論評	×	×	×	×		×	自主研究	×	×	×		×	×

出所) CalArts (2014) の3～4頁より筆者作成  
 ※表2横列の1～6は、表1縦列の1～6を指す

表3 全体的なライティングルーブリック

執筆者は優れたライティング能力を示す。執筆者のペーパーは、完全かつ効果的に開発された内容と修辞上の精巧さによって識別される。

このカテゴリにおけるエッセイは典型的に：

- ・ 課題の条件を満たしながら、非常に優れた洞察力、視野の広さ、または、独創性をもってトピックに応じている；
- ・ 主なアイデアについて、明確に焦点化され、効果的に体系化され、そして、理路整然と展開されている；
- ・ 具体的な事例と詳細を適切かつ効果的に用いている；
- ・ 言葉遣い、フレーズ、構文の多様性を含む言語の優れた操作を示している；
- ・ 軽微な不備はいくつかあるものの、語法、文法、言語の慣用法の重大な誤りがない。

執筆者は優れたライティング能力を示す。執筆者のペーパーは、上級者のものよりもやや思慮に欠け、あるいは、やや洗練されていないかもしれないが、その内容や展開は確固としたものであり、また、効果的な表現方法を用いている。これらの学生は明らかに及第点のペーパーを書くことができる。

執筆者は、十分な大学レベルのライティング能力を示す。執筆者のペーパーは、内容、展開、または、表現方法において平凡なものであるかもしれないが、その執筆は、執筆者が上級のライティングコースへの準備ができていないことを示すのに十分な能力がある内容であること。文体の不十分さは、執筆者がアイデアを展開し、伝える能力を著しく制限しないこと。

以下のスコアは及第点に達しないことを意味する。

執筆者のエッセイは、不十分な大学レベルのライティング力を反映している。執筆者のペーパーは、内容、展開、または、表現において重大な欠点があり、執筆者がまだ上位区分のライティングを扱う準備ができていないことを示している。文体の不十分さは、執筆者がアイデアを展開し、伝える能力を著しく制限している。

執筆者のエッセイは非常に薄弱なライティングを表している。  
 執筆者のペーパーは、重度の欠点、または、欠点の組み合わせのいずれかによって特徴付けられている。

執筆者のエッセイは、課題に対する最小限の反応のみを示している。このスコアは、主題に対する有意義な応答を行ったり、展開することに失敗している、または、ほとんど支離滅裂な段落を一貫して作成している執筆者のために用意されたものである。

出所) CalArts (2017) の13頁より筆者作成

ングルーブリックがある。全体的ルーブリックは、分析的ルーブリックよりも詳細な内容ではないが、CT 分野のアセスメントでは主観的評価が求められる場合が多いため、CT 分野のアセスメントを行う上で有効的である。全体的ルーブリックは、一般的にアセスメントの基準は示されているが、どのようにその基準を満たすかという点については詳述していない。この意味において、学生は創造的かつ自由な表現を教員から出された課題に対して行うことができるという利点がある。

## (2) 分析的ルーブリック

分析的ルーブリックの事例として、CT 分野では、口頭でのプレゼンテーションが重要であるため、表4のルーブリックの事例を取り上げる。このルーブリックでは、縦軸に3つの評価基準を置き、それに対し学生が到達しているレベルを示したものを4段階にわけて横軸に置き評価する方法を採用している。このようなルーブリックでは、予め評価の基準が示されていることから、評価する側と評価される側の認識が共有される、複数の評価者による評価のズレやブレを防ぐことができる等の利点がある。

## 4. 毎年のアセスメントレポート

CalArts では、これまで述べたアセスメントをベースに、各学部の各専攻で、表5のアセスメントレポートを毎年度作成している。このレポートの目的は、教育プログラムや教授法の研究のために、各教育プログラムでの学習成果の発見を文書化することにある。このレポートは各専攻の責任者が取り纏め、簡潔に1～3枚程度の文書にして、各学部長に提出する。このテンプレートは、学生の学習、ニーズ、成功に焦点を当てた、まさに、学習成果の設定・評価にフォーカスした内容になっている。

## 5. プログラムレビューのサイクルと手法

CalArts では、図1のプログラムレビューの7年サイクルを定め、最初の年度にアセスメント計画を確立し、続く2～6年度に、その計画に示されたアセスメントスケジュールに沿ったアセスメントレポートを作成し評価を行う。そして、7年目に、そのレポートからのデータに基づく自己点検・評価を行うと共に、CalArts 以外の同僚 (peer) からなる各分野の専門家による外部評価を実施する。CalArts では、学外者の参画を得たプログラムレビューを実施し、評価の客観

表4 口頭でのプレゼンテーションのルーブリック

口頭でのプレゼンテーション	認め難い	改善が必要	発展途上	格別
内容の質	研究上の欠陥があり、アイデアが独創的でなく、専門分野の学識と関連していない	独創的なアイデアはあるが、研究上の欠陥があり、専門分野の学識と関連していない	専門分野の学識向上に寄与する堅実な研究であるが、アイデアがとても独創的であるようには見受けられない	専門分野の学識向上に寄与する堅実な研究から独創的なアイデアが導かれている
構成と明瞭さ	プロセスと結果が明確にプレゼンテーションされておらず、事例も関連性がないように見受けられ、結論も明確でない	研究プロセスが明確でなく、結果は記述されているが、事例に乏しいものの、結論は合理的である	研究プロセスと結果が優良な事例を伴って記述されているが、結論は明確でない	研究プロセスは明確であり、結果は、具体的に要約されており、関連する事例や結論も明確で説得力がある
ビジュアルの有効性	ビジュアルに関する資料が研究に関連しているように見受けられず、また、分かりにくい；学生は質問に答えることができず、また、研究について議論することができない	ビジュアルに関する資料が分かりにくく、グラフィックを用いて説明がなされていない；学生は、研究についてレビューすることはできるが、特定の質問に対して答えることができない	ビジュアルに関する資料が体系化されているが、フォント、色、グラフィックについては、明瞭さが担保されていない；学生は質問に答えることができる	ビジュアルに関する資料が体系化されており、フォント、色、グラフィックが賢明に使用されている；学生は容易に質問に答えることができ、研究について議論することができる
コメント：				

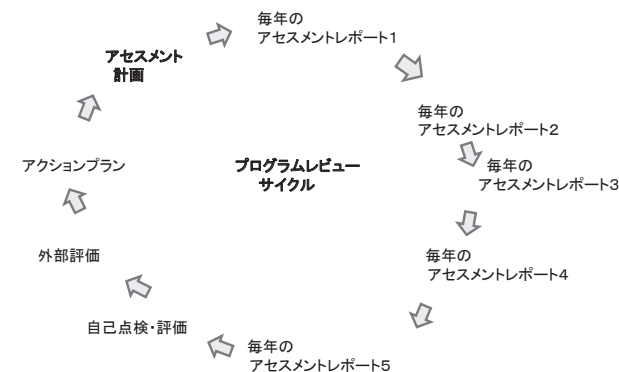
出所) CalArts (2017) の14頁より筆者作成

表5 アセスメントレポートのテンプレート

年度 学部 プログラム 学位レベル 提出期限 学部長・学科長への提出日
指示 下記の各カテゴリーに沿って、以下をご記入ください  1) あなたの主張を支持する事例 2) あなたが認識した問題がどのように取り組まれているかについての1次見解
I. 学生の学習  プログラムアセスメントによる発見（ポートフォリオ、中間在籍時レビュー（mid-residency reviews）、アウトカムベースの課題、コースエバリュエーションなど）に基づき、学生は、あなたの教員が期待している学習成果と芸術創造のレベルにおいて、あなたのプログラムの表明しているアウトカムに到達していますか？  （例えば、どの学習成果が最も高いレベルで実証されていますか？また、どの学習成果が十分に実証されていないといえますか？）
II. 学生のニーズ  学生調査、コースエバリュエーション、及び学生のミーティングやフォーカスグループなどから集められた情報の結果をレビューする時に、何か顕著な、あるいは、テーマ別の問題はありますか？  （例えば、あなたは、驚くべき結果、複数年度に亘って続く問題、複数の関係者からの同様な意見、及び教員の懸念に対して適切に対処した応答などを発見しましたか？）
III. 学生の成功 あなたの学生の入学状況、卒業率、及び在籍率を評価するときに、あなたは、現時点または将来のある時点において、あなたのプログラムのミッションを果たす能力に影響を及ぼす何らかの傾向があることに気づいていますか？  （例えば、高い水準の学生を引き付け、維持し、そして卒業させるあなたの能力に潜在的に影響を及ぼす既知の障害はありますか？）

出所) CalArts (2017) の20頁より筆者作成

図1 プログラムレビューサイクル



プログラムレビューの7年サイクル	
年度: 1   8   など	- 最初の年度にアセスメント計画を確立する - 次に続く年度に必要な応じてその計画を修正する。そして、以前のレビューサイクルからのアクションプランを実行する
年度: 2-6   9-13   など	- その計画に示されたアセスメントスケジュールに沿った、学生の学習成果の評価に基づくアセスメント計画を実行する
年度: 7   14   など	- 毎年のアセスメントレポートからのデータに基づく自己点検・評価を行う - CalArts以外の同僚からなる各分野の専門家による外部評価の実施 - 自己点検・評価と外部評価結果に基づくアクションプランの受領

出所) CalArts (2017) の21頁より筆者作成

性・透明性を高めている。

その外部評価の評価者は、概ね2～3名で構成され、書面評価並びに1～2日の実地調査を行い、その結果を表6のルーブリックの観点に基づき、同調査の1ヶ月程度以内に、3～5ページ程度のレポートとしてまとめ、CalArtsへ提示する。

#### IV. わが国の高等教育機関への示唆

Iで述べた問題提起に対して、CalArtsの取組の特徴を考察し、CT系大学への示唆を以下3つの観点から導出する。

##### 1. 学習成果の設定・評価

CalArtsでは、まず各学部・研究科の各専攻における学習成果を明確に定め、次にその学習成果と各授業科目が連動するように設定したカリキュラムマップを

作成した上で、更に各学部・研究科において、アセスメントレポートとして学習成果にフォーカスした評価を行っている点が特徴的である。

現在、わが国の大学は、知識・技能・態度等の学習成果を学位授与方針に明確に示した上で、その学習成果を学生が修得したかどうかを把握し、評価することが求められている。こうした責務に対して、今後CT系大学は、測定可能な学習成果を定め、その評価と結果の公表を通じて、大学の社会に対する説明責任を行っていく必要があり、その際の参考として上記のCalArtsの先進事例は活用できると考える。

##### 2. プログラムレビュー

CalArtsでは、2～6年目における毎年の学内でのアセスメントと7年に1回のルーブリックを用いた学外者による外部評価を行い、体系的にプログラムレ

表6 外部レポートのルーブリック（外部評価者が使用するためのもの）

基準	未発展	発展途上	十分に確立	格別
目標の到達度	アウトカムがいくつかのケースにおいて専門分野と関連していない	アウトカムが専門分野と関連している	アウトカムが専門分野に関連した知識、スキル、価値に基づいており、そして、規則的かつ組織的に評価され、報告されている	アウトカムが専門分野に関連した知識、スキル、価値に基づいており、そして、規則的かつ組織的に評価され、報告されている。さらに、それがフォローアップされ、プログラム計画に統合されている
カリキュラムレビュー	カリキュラムがいくつかの点において、当該学位に対して不適切である	カリキュラムが当該学位に対しておおむね適切である。そして、カリキュラムはタイムリーに完了できるように設計されている	カリキュラムが当該学位に対して適切である。そして、カリキュラムはタイムリーに完了できるように設計されている。そして/あるいは、カリキュラムは、期待されるアウトカムを達成するために、学生にとって適切な機会を提供している	カリキュラムが当該学位に対して、最新のものであり、また、適切である。そして、カリキュラムはタイムリーに完了できるように設計されている。そして、カリキュラムは、期待されるアウトカムを達成するために、学生にとって適切な機会を提供している
学生の経験	学生と教員間の連携がしばしば促進されていない；学生はおおむね不満足である	学生と教員間の連携がたいてい促進されている；学生はおおむね満足している	学生と教員間の連携が促進されている；学生は、メンタリング、アドバイジング、学術的なサポート、施設・設備、テクノロジー、インターンシップ、エキシビジョン、あるいは、パフォーマンス機会などの質に対して、おおむね満足している	学生と教員間の連携が促進され、また、円滑になされている；学生は、メンタリング、アドバイジング、学術的なサポート、施設・設備、テクノロジー、インターンシップ、エキシビジョン、あるいは、パフォーマンス機会などの質に対して、非常に満足している
リソースプランニング	プログラムは学部長のニーズを明確に示していない。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することもなされていない	プログラムはニーズの優先順位付けがなされており、学部長のニーズが明確になっている。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することがおおむねなされている	プログラムの優先順位は特有の目的やラーニングアウトカムに基づいて、その必要性が規定され、学部長のニーズが明確になっている。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することがなされている	プログラムの優先順位が、現実的に特有の目的やラーニングアウトカムに基づいて、その必要性が規定され、学部長のニーズが十分かつ適切に明確になっている。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することがなされている

出所) CalArts (2017) の27頁より筆者作成

ビューを実施している点が特徴的である。今後CT分野の高等教育の質保証・向上を図る上で、CalArtsで実施されている様な学内でのアセスメントと学外者による外部評価を組み合わせたプログラムレビューを、CT系大学自らが実施することが有効であると考え<sup>4</sup>。

### 3. ルーブリック

CalArtsでは、アセスメントツールの1つとしてルーブリックが活用され、CT分野で重要な全体的及び分析的ルーブリックを用いたレポートやプレゼンテーションの評価が行われている点が特徴的である。

このルーブリックに関して、わが国大学への全数調査（回答数561大学）によると、学習成果の評価方法としてのルーブリックの使用割合は、全体の8.9%であるが（あずさ監査法人，2014，32頁）、ルーブリックの活用を導入すべきかという全数調査（回答数684件）によると、「導入すべき」は149件（21.8%）、「どちらかといえば導入すべき」は280件（40.9%）、「どちらかといえば導入する必要はない」は116件（17.0%）、「導入する必要はない」は38件（5.6%）であった（中央教育審議会，2012，84頁）。この様に多

くの大学がルーブリックの必要性を感じている。

以上の点に鑑み、今後CT系大学において、CalArtsで実施されている様な学習成果の観点・基準を定めたルーブリックの活用が重要になってくると考える。

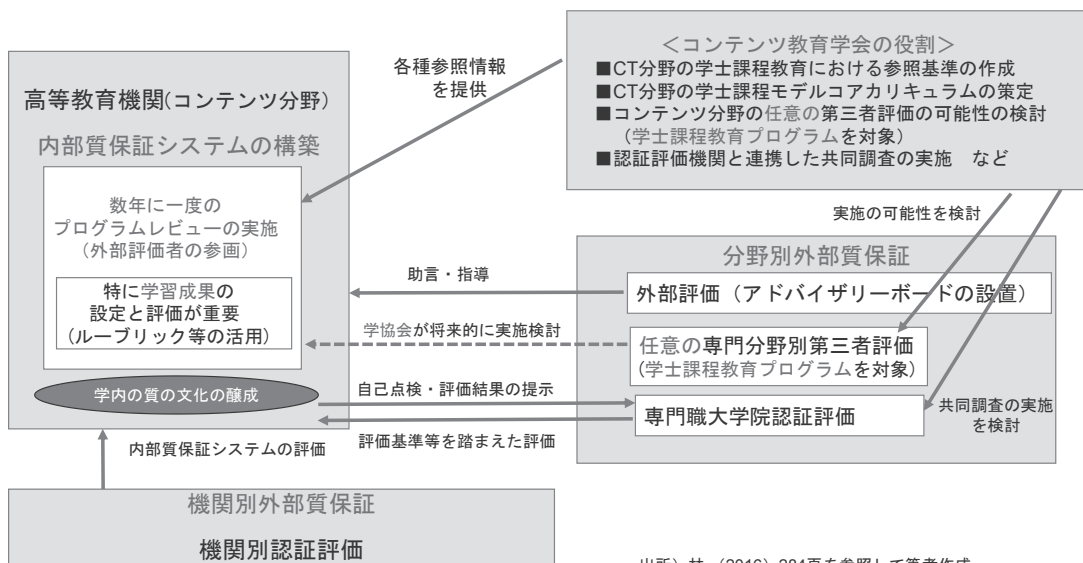
## V. CT分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割

これまでの考察を踏まえ、上記Vを図2に沿って以下で述べる。但し、下記提言は、コンテンツ教育学会を代表して述べるものではなく、筆者個人の見解であることを予め断っておく。

### 1. CT分野の質保証システムの将来像

CT系大学では、上記ⅢでCalArtsの取組の特徴を考察し、そこから上記ⅣでCT系大学への示唆を導出したことから分かるように、外部評価者の参画を得たプログラムレビューを実施することが重要であり、その際、特にルーブリック等を用いた学習成果の設定と評価が重要となる。更にUNESCO-CEPES（2007）による「質保証のための活動は、確固とした質の文化によって支えられる高等教育機関内のメカニズムにか

図2 CT分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割（私案）



出所) 林 (2016) 284頁を参照して筆者作成。



かっている」との指摘や、OECD による「高等教育においてきわめて重要なことは、質を維持向上させるという文化を学内に醸成させることである（OECD, 2009, 116頁）」との指摘の通り、質に対する学内構成員の意識を高める（質の文化の醸成）ことが重要である。この様な観点を重視した内部質保証システムを構築することが重要である。

そして、機関別外部質保証としては、この内部質保証システムの認証評価を行い、分野別外部質保証としては、アドバイザーボード等による外部評価がCT系大学に対して助言や指導を行い、また、評価基準等を踏まえた専門職大学院認証評価を同評価機関が行うといった外部質保証システムが考えられる。更に、現在はCT系大学の学士課程教育に対する専門分野別第三者評価は実施されていないが、その必要性を認めた学協会（コンテンツ教育学会等）が中心となって、認証評価制度とは別の枠組み（以下「任意」）の同評価を実施することを検討すべきである<sup>5</sup>。

## 2. コンテンツ教育学会の役割

今後CT分野の高等教育の質保証・向上を推進していくために、CT分野の高等教育に焦点を当てその質保証・向上を図ることを事業目的の1つとして2016年1月に設立されたコンテンツ教育学会の役割が、CalArtsの事例考察から導き出されたCT分野の質保証システムの将来像の中で、図2に示したとおり、非常に重要な役割を担っていると考える。その観点に立ち、コンテンツ教育学会の果たすべき役割に関する提言（私案）を以下で4点述べる。

### (1) 学士課程教育の参照基準の作成

学士課程教育におけるCT分野では、英国QAAのArt and DesignやHistory of Art, Architecture and Design等の分野別参照基準があるが、これらを参考に、学士課程教育におけるCT分野の参照基準を作成すべきである。また、必要に応じ日本学術会議関係者とも連携して、同基準を作成するコンテンツの分野や定義を明確にする必要がある。更に、その際には、CT分野ごとの育成すべき資質・能力等を詳述し、

CT系大学へ将来的に情報提供を行うことが考えられる。

### (2) 学士課程モデルコアカリキュラムの策定

NASADの評価基準等を参考に、学士課程教育のCT分野のモデルコアカリキュラムを作成する必要がある。更にそれを将来的に策定した場合、任意の専門分野別第三者評価でその充足状況等を確認し、CT分野の高等教育の質保証・向上に繋げることを検討する必要がある。

### (3) 任意の専門分野別第三者評価の可能性の検討

学士課程教育における任意のCT分野の第三者評価の可能性を検討するにあたっては、まず対象とする専門分野をどこまで広げるのか、次に国際的水準との同等性を求める基準（NASADの評価基準等）に即して評価を行い、国際的見地から当該教育プログラムを保証するのか、国際基準への適合・不適合を判断することが可能かどうか等を検討する必要がある。更にその活動を支える人材の確保・育成と財政基盤の確立が不可欠である<sup>6</sup>。

### (4) 認証評価機関と連携した共同調査の実施

海外のCT分野の評価機関・評価受審大学の実態調査を行うことが必要である。その際、今後、コンテンツ教育学会と各認証評価機関とが連携して共同調査を実施し、その成果を同学会の上記3つの役割の課題解決や、各認証評価機関の認証評価システム等の改善に還元すること等が考えられる。

以上のとおり、これからのCT分野の高等教育の質保証・向上においては、各大学と共に認証評価機関、日本学術会議、更にはコンテンツ教育学会が協働して取り組んでいくことが必要であると考えられる。本稿がそのための一助となり、また、こうした取組を今後推進する1つの契機となれば幸いである。

## VI. 残された課題

最後に、今後さらに研究を進めるべき残された課題を以下に2点示す。

第1に CalArts と CT 系大学を比較考察するなど、さらに踏み込んだ実践的な研究が必要である。CalArts の事例から CT 系大学へのより説得力ある示唆を導くためには、そうした比較考察を行い、CalArts の事例を CT 系大学に導入する際の利点や課題等を明らかにすることや、CalArts の事例を CT 系大学に実際に適用し、その上で有効性と問題点や改善点を明らかにすることが今後必要である。

第2に先行研究の幅広いレビューが必要である。本稿は CT 分野の先行事例研究のレビューにとどまっているが、今後は CT 分野での教育に関する研究、高等教育機関での学習成果の設定と評価やプログラムレビューの実施等に関する研究を幅広く批判的に検討し、問題意識のさらなる絞り込みを行うことが必要である。

## 【脚注】

- 1 「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」(平成十六年六月四日法律第八十一号)の第二条の定義によれば、コンテンツとは、「映画、音楽、演劇、文芸、写真、漫画、アニメーション、コンピュータゲームその他の文字、図形、色彩、音声、動作もしくは映像もしくはこれらを組み合わせたもの、またはこれらに係る情報を電子計算機を介して提供するためのプログラム(電子計算機に対する指令であって、一の結果を得ることができるように組み合わせたものをいう)であって、人間の創造的活動により生み出されるもののうち、教養又は娯楽の範囲に属するもの」と定義されている。
- 2 これらの数字は CalArts (2016) に基づく。
- 3 この点は *CalArts Ranked No. 1 Animation School in U. S* (<http://www.hometownstation.com/santa-clarita-news/education/calarts-ranked-no-1-animation-school-in-u-s-156098>) (参照日2018/3/24) に基づく。
- 4 大学基準協会(2015)の31、44頁において、全国のがが国の大学へのアンケート結果より(回答率:49%)、教育プログラムレビューの教育改善への寄与率はどの規模の大学でも極めて高いことが示され

ている。

- 5 最後の点は工藤(2016)の51頁を参考にして記述。
- 6 これらの点は工藤(2016)の51頁を参考にして記述。

## 【参考文献】

- CalArts (2014) *CalArts Academic Assessment Plan*  
[https://calarts.edu/Portals/0/Documents/FV-Experimental\\_Animation.pdf?ver=2017-03-14-102500-077](https://calarts.edu/Portals/0/Documents/FV-Experimental_Animation.pdf?ver=2017-03-14-102500-077) (参照日2018/3/24)
- CalArts (2016) *2016-17 Factbook*  
<https://calarts.edu/Portals/0/Documents/2017%20FACTBOOK-Final.pdf?ver=2017-08-21-133602-503> (参照日2018/3/24)
- CalArts (2017) *HANDBOOK FOR PROGRAM ASSESSMENT & REVIEW*  
[https://calarts.edu/Portals/0/Documents/Program\\_Review\\_Handbook.pdf?ver=2017-03-08-103113-803](https://calarts.edu/Portals/0/Documents/Program_Review_Handbook.pdf?ver=2017-03-08-103113-803) (参照日2018/3/24)
- UNESCO-CEPES (2007) *Quality Assurance and Accreditation: A Glossary of Basic Terms and Definitions*
- あずさ監査法人(2014)「学修成果の把握と学修成果の評価についての具体的方策に関する調査研究」報告書
- OECD 編/森利枝訳(2009)『OECD 高等教育政策レビュー:日本』明石書店
- 工藤潤(2016)「大学基準協会は専門分野別評価といかに向き合うべきか」大学基準協会『大学評価研究第15号』
- 大学改革支援・学位授与機構(2016)「高等教育に関する質保証関係用語集」
- 大学基準協会(2015)『内部質保証ハンドブック』
- 中央教育審議会(2012)「学士課程教育の現状と課題に関するアンケート調査」の概要
- 中央教育審議会大学分科会将来構想部会(2017)「今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」(平成29年12月28日)
- 日本高等教育評価機構(2007)「海外におけるファッ

ション系高等教育機関に係る評価機関並びに被評価機関（大学院等）のアクレディテーションの実態に関する調査研究』『認証評価に関する調査研究』  
林隆之（2016）「9. まとめ：国内における分野別評価の実施枠組みの提案」大学評価・学位授与機構編『我が国における大学教育の分野別質保証の在り方

に関する調査研究報告書』  
未来工学研究所（2009）『大学の質保証及び学位プログラムの在り方に関する調査研究報告書』  
山口豪（2018）「QAA 分野別参照基準 アート&デザイン 2017年2月（邦文仮訳）」『コンテンツ教育学会誌 Vol.2』26～47頁

---

# Consideration of program review at the California Institute of the Arts

## - Implications for quality assurance and improvement of content education field in Japan-

---

※ Go YAMAGUCHI

**[Key Words]**

Learning Outcomes, Program Review, Curriculum Map, Rubric, Experimental Animation

**[Abstract]**

The purpose of this study is to consider the characteristics of program review at the California Institute of the Arts so that each university related to content education field in Japan will be able to assure and improve the quality of its educational and research activities.

First, a general view of the recent environments surrounding Japanese universities related to content education field is provided, and second, previous research related to the program review at the California Institute of the Arts is surveyed in this paper.

Third, the forward-looking program review at the California Institute of the Arts is analyzed, focusing on outcome assessments, rubrics as an assessment tool, the system of an annual assessment report, program review cycle, and the system of an external review.

Finally, based on the above considerations, future directions to quality assurance and improvement of content education field in Japan and recommendations on the role of creative content research association are proposed.

---

※ Undergraduate Academic Affairs, Digital Hollywood University